

特別支援学校における見ることの支援に関する各地域の活動の成果と課題

企画者	奥山 敬	(東京都立光明学園)
司会者	奥山 敬	(東京都立光明学園)
話題提供者	浅野 理々	(京都市教育委員会)
	堀川 順子	(奈良県立奈良養護学校)
	松本健太郎	(東京都立多摩桜の丘学園)
指定討論者	佐島 毅	(筑波大学人間系)
	中野 泰志	(慶應義塾大学)

KEY WORDS: 視機能支援、重複障害、寄り添った支援

【企画趣旨】

感覚のうちもっとも多く情報を取り入れているのが視覚である(中澤恵江, 2008)。

1990年代の当初、都立の肢体不自由養護学校(当時)では、「見る」ことの支援に必要な情報がほとんどなかった。児童生徒が見えているのかどうかよくわからず、入学から卒業までの間に見ることにに関して支援できずにいた。

1997年に、中野泰志氏(当時国立特殊教育総合研究所)らが都立村山養護学校小低部に継続的に研修の機会を提供したことを契機に、2000年4月に東京都肢体不自由教育研究会(都肢研)の中に視機能支援部会が設立され、肢体不自由特別支援学校の児童生徒の見ることの支援について研修の機会を設け、見ることの支援に関する情報を蓄積・共有する研修活動を行ってきた。

同様の活動が京都や奈良県でも続けられ、見ることの支援を支える組織やキーパーソンが活動してきた。

村山養護における支援から20年が経過した今、それぞれの地域での活動について報告することを通して、活動の意義や今後の課題を明らかにしていきたい。

【話題提供者の要旨】

話題提供1: 京都市立総合支援学校教育研究会感覚障害教育研究会の成果と課題(浅野理々)

京都市では、平成16年度の障害種別の枠を超えた地域制・総合制支援学校再編に向けて、知肢の専門性に加えて視覚聴覚の専門性を身につける必要性から、17年に感覚障害教育研究会を立ち上げた。障害が重度重複化する中で「見え」や「聞こえ」に注目する必要がある、外部講師を招いての研修や事例検討を重ねてきた。

研究会発足から14年目、世代交代の時期を迎え、基本的用語を学び直しする必要性も見られ、「見え」や「聞こえ」についての基礎知識の小冊子を作成し日々の取組で活用している。今回は、研究会の成果と課題を報告する。

話題提供2: 「みる」という視点も大切にしたいわかりやすい環境づくり・授業づくりにおける実践と課題(堀川順子)

2003年「先生、うちの子見えていますか。」という保護者のひとことから、教育現場における視覚的な実態把握とわかりやすい環境、魅力的な教材について考え、子どもたちとともに学習活動に取り組む機会をもらった。より豊かな日常生活につながり、子どもたちをサポートする教員、保護者、他職種の人々との連携を通して、子どもたち一人ひとりの「みる」に少しでも迫り、視覚活用を促す中での変化と課題について報告する。

話題提供3: 東京都肢体不自由教育研究会視機能支援部会の成果と課題(松本健太郎)

2000年に設立された東京都肢体不自由教育研究会視機能支援部は、春季、夏季、冬季の年3回研究協議会を開催

している。各研究協議会では、子どもたちの困難さに寄り添い学びを支えることをテーマに、研究者の講演、疑似体験、実践報告を行い、支援者の気づきを促す有用な情報を共有している。20年近く継続的に活動する中で、最も大切にしてきたのは、障害の重い子どものみかけの重度さによって、内面を過小評価することなく適切な環境を整え、可能性を最大限に伸ばす実践である。肢体不自由特別支援学校においても見ることの支援について関心が高まり、まぶしさの軽減、背景の整理、提示する刺激量の調整、教材のコントラストなどを意識しながら環境整備を行う事例が部員の勤務校を中心に見られるようになった。また、外部専門家として視能訓練士が配置される学校が増えてきた。今回は、活動の成果と課題について述べたい。

【指定討論者の要旨】

指定討論者1: 障害の重い子どもの感覚機能の評価(佐島毅)

障害のある子どもの教育は感覚・運動・認知機能の評価からはじまる。重度・重複障害と一括りにする子どもたちの感覚機能の評価の重要性と難しさを踏まえて、話題提供者の長年の実践知から私たちが学ぶべきことについて、フロアとともに共有したい。

指定討論者2: 障害を併せ有する児童生徒の行動の理解と適切な人的支援・環境整備という観点からの討論(中野泰志)

1992年に重度・重複障害のある児童生徒の視機能評価や環境整備に関する実践的研究を、1994年に「障害を理解し、共に学ぶための疑似体験セミナー」を、1996年にATACカンファレンスでワークショップを実施したことがきっかけで視機能支援部会のコアメンバーと出会うことになった。教育的な視機能評価は、児童生徒の行動の意味の理解、適切な指導、環境の整備等を行う際に重要な役割を果たす。指定討論では、重度・重複障害のある児童生徒の視機能を生活の文脈の中で評価・理解する意義やそのために必要な他職種との連携の必要性を中心に議論を展開する。

【文献】

中野泰志(1999)教育的な視機能評価と配慮. 大川原潔ら(編), 視力の弱い子どもの理解と支援. 教育出版, 60-70.

中澤恵江(2008)重複障害児のアセスメント研究—自立活動の環境の把握とコミュニケーションに焦点をあてて— . 教育支援研究部, 課題別研究成果報告書, 国立特別支援教育総合研究所, 19-25.

佐島毅(2007)視覚に障害のある子どもの指導. 日本肢体不自由教育研究会(編), 肢体不自由教育の基本とその展開, 慶應義塾大学出版会, 188-207.

(OKUYAMA Takashi, ASANO Riri, HORIKAWA Junko, MATSUMOTO Kentaro, SASHIMA Tsuyoshi, NAKANO Yasushi)